

促成栽培かき「前川次郎」の果実肥大特性							
【要約】かき「前川次郎」の促成栽培と露地栽培の果実肥大を満開後日数で比較した場合、肥大量の変化する時期が異なり、特に、 <u>気温低下</u> の小さい時期が成熟期となる1月加温の促成栽培では、果実肥大のパターンから <u>果実発育第 期</u> が特定できない。							
三重県科学技術振興センター・農業技術センター・園芸グループ					連絡先	05984-2-6358	
部会名	果 樹	専 門	栽 培	対 象	果樹類	分 類	研 究

【背景・ねらい】

促成栽培かき「前川次郎」は、露地栽培と比較して果実の着色特性が異なり、また、収穫時の果実も大きい。このような状況から、促成栽培における高品質果実の安定生産のためには、さらに果実の成熟特性を明らかにする必要がある。

そこで、果実肥大に関して、促成栽培と露地栽培との違いを明らかにするとともに、気温との関係についての考察を行った。なお、気温について解析した時期の促成栽培は、サイドビニルを解放しているか全てのビニルを除去した状態であり、解析に用いた気温は、促成、露地栽培ともに試験圃場と10km程度離れている津地方気象台の測定値とした。

【成果の内容・特徴】

1. 3月加温の促成栽培では、果実肥大のパターンは露地栽培と同じであるが、果実発育第 期に入るのは遅い(図1-A)。満開後100日以降の気温は露地栽培より高いが、気温の低下速度はほぼ同じである。
2. 1月加温の促成栽培では、着色開始期は露地栽培より遅く、また、果実肥大のパターンから果実発育第 期は特定できず、成熟終盤にかけて肥大量が増加する(図1-B)。満開120日以降の気温は促成栽培のほうが高く、また、気温低下速度も緩慢である。
3. 以上より、かき「前川次郎」の促成栽培と露地栽培では、成熟期における果実肥大の時期やパターンが異なり、この時期の気温変化との関連が深いことが示唆される。

【成果の活用面・留意点】

1. 気温と果実肥大との関係を解析する上での基礎資料となる。
2. 果実赤道部の果周をメジャーで測定し、果実肥大の指標とした。

【具体的データ】

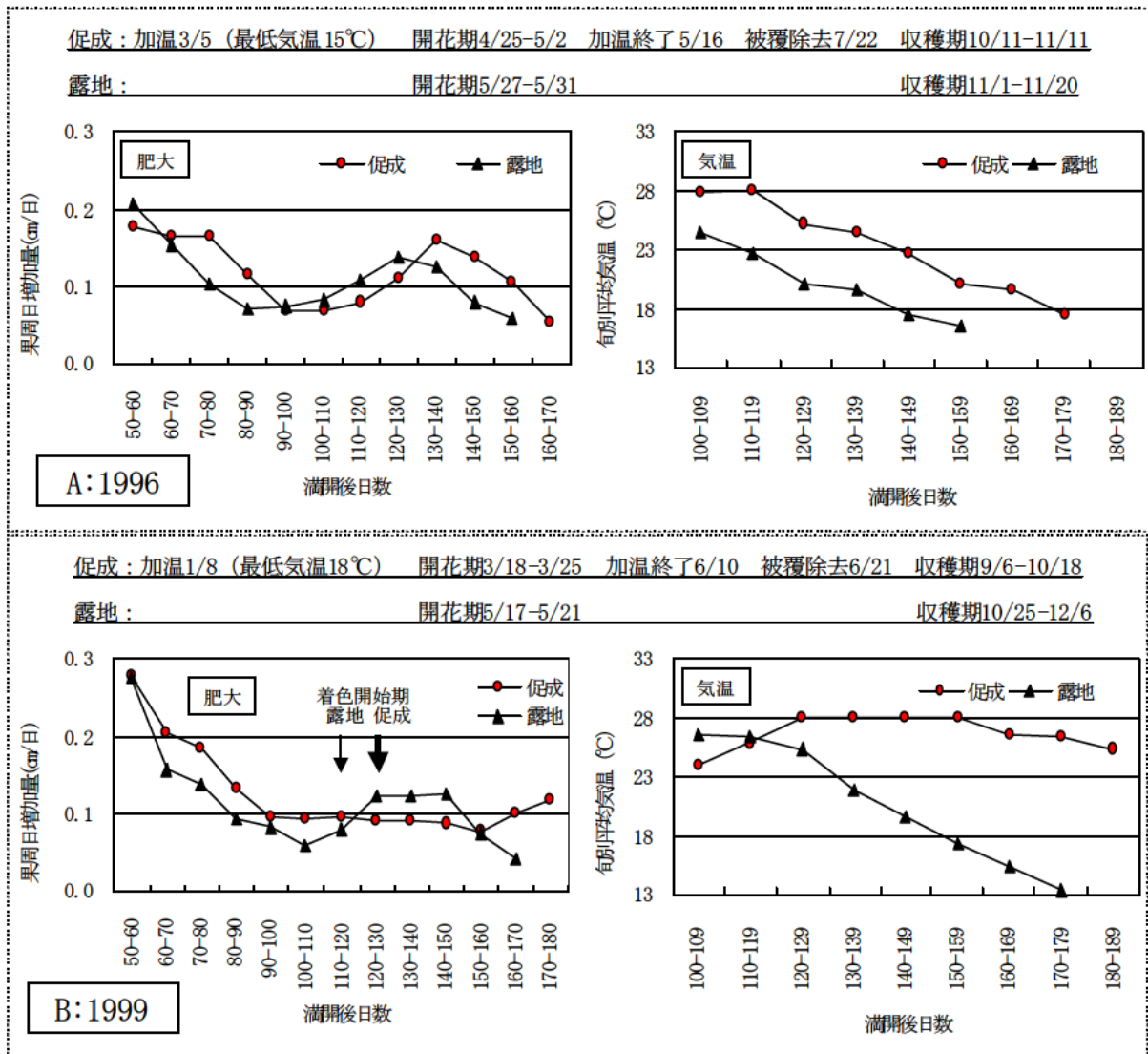


図1 かき「前川次郎」果実の日肥大量と旬別平均気温推移の作型および年次の比較

【その他】

研究課題名：甘ガキ生産における経営安定のための作期拡大と品質向上技術の確立  
 予算区分：国補（農林水産新技術実用化型）  
 研究期間：平成12年度（平成8～12年）  
 研究担当者：伊藤 寿，西川 豊，前川哲男